

現代の物書きを全国から参集させ、創作活動の実証実験へ
——古民家をリノベーションした「みはらし亭」の挑戦

商業港としての発展と文化資産を抱える尾道に息づく「みはらし亭」

広島県尾道市は、広島県東部に位置する人口約 15 万人の都市である。瀬戸内海に面した温暖な港町で、古くから商業港として発展してきた。千光寺・浄土寺など古寺が多く、小説家・志賀直哉の「暗夜行路」や、林芙美子の「放浪記」などの作品にも描かれた。また映画では小津安二郎監督の「東京物語」や大林宣彦監督の尾道 3 部作と呼ばれる「時をかける少女」、「転校生」、「さびしんぼう」のヒット作を生んだ。どこか懐かしい風景に誘われて、国内外から年間約 670 万人の観光客が訪れる日本有数の観光地のひとつである。



瀬戸内海に面した温暖な港町の尾道

その尾道に 2016 年にオープンした「みはらし亭」という古民家を再生したゲストハウスがある。海を背に石段を 360 段登り、千光寺の約 100m 手前という崖の上に建つ。そこからの眺めは絶景である。

「みはらし亭」は 1921 年に建てられた「茶園」という建築様式の別荘だ。尾道が港町として発展した時代に、地元の豪商たちは自らの栄華の象徴として、こぞって眺めの良い山の斜面にこうした茶園を建てた。みはらし亭もそんな茶園のひとつとして、客人をもてなしたり、桜を眺めたり、お茶を楽しんだりする別荘だったのである。その後、旅館として営業された時期もあったようだが、20 年近く空き家となっていた。それを NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトがリノベーションし、ゲストハウスとして生まれ変わった。

空き家問題の解決策を探る NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト

この NPO が生まれた背景には、空洞化と高齢化の進展によって空き家問題が深刻な社会課題になったことが、大きく影を落としている。尾道も例外ではない。

総務省「平成 25 (2013) 年住宅・土地統計調査」によれば、全国の空き家は 820 万戸 (住宅総数 6,063 万戸) であり、空き家率は 13.5%。約 7 件に 1 件は空き家という計算である。現在はその数はさらに増えていると予想される。2018 年 6 月に出された野村総研「2030 年の住宅市場と課題～人手不足の深刻化により、飛躍的な生産性向上が求められる建設現場～」によれば、空き家数はすでに 1,000 万軒を超えている。この調査結果では、2033 年には 1,955 万戸、空き家率は 27.3%、実に 4 軒に 1 軒が空き家になると予測されている。

■ 除却・減築が進まないことによって、「その他の住宅」が引き続き増加するとともに、世帯数の減少によって「賃貸用・売却用の住宅」が増加すると考えられる。



出所: 野村総研 レポート「2030 年の住宅市場 ～人手不足の深刻化により、飛躍的な生産性向上が求められる建設現場～」(2018)

同 NPO の活動は尾道の空き家を再生し、新たな活用を提案している。再生していく中で「尾道ならではの」地域資源に根差したまちづくりの展開を目指す。



海を背に石段を 360 段登った高台に位置する「みはらし亭」



風景の一部のように生息するたくさんの猫

2015 年 1 月、同 NPO のメンバー及びボランティアによって、再生のため大改修が開始され、2016 年のオープンに至った。

その 2 年前、2013 年には登録文化財に指定された。そのせいだろうか、外観にはほぼ手が加えられていない。カフェや離れのサロンにある古い写真を見て現状と比較すると一目瞭然である。時空を超えて建物が今ここに存在し続けていることに感動する。



離れのサロンに古い写真が残されている

レトロな面影を感じさせるカフェ

現代の物書きを集め、創作活動の場を提供

みはらし亭のユニークなイベントとして、「ライターズ イン レジデンス」という試みが2018年から始まった。

小説家、エッセイスト、詩人、脚本家、漫画家、ブロガー、論文を書く学生、映画監督等を全国から公募し、ジャンルやプロアマを問わず幅広く「現代の物書き」をみはらし亭で1週間以上最大3週間宿泊させ、滞在中に創作活動をさせる。ライターには水道光熱費だけの負担で、宿泊費の負担はない。

2019年も1月15日～2月7日の会期で開催され、1月19日、26日、2月2日の毎週土曜日の17～19時に市民とライター達との交流パーティーがカフェで行われる。

時間と場所を問わないテレワークとしても有効

筆者も東京都品川区からこのイベントに参加し、2019年1月21日～27日までの1週間、みはらし亭に宿泊した。滞在期間中の拘束は特になく、自由に自らの創作活動のスケジュールを組み立てる。ちなみに筆者の1日のスケジュールはだいたいこうだった。朝6時30分起床。7時30分朝食。9時30分、みはらし亭を出発し尾道駅へ向かう。レンタサイクルを調達し、市内の商店街や文化遺産などを見て回る。12:00 商店街のお店で昼食をし、しばらく観光。14:30頃に尾道駅を出発し、15:00 みはらし亭到着。その後夕食や入浴をはさんで約6時間執筆。23時就寝。みはらし亭から尾道駅までの約25分は坂道と階段が多い。日に往復するだけでも大変な運動量だ。心地よい疲労感で毎日、ぐっすり眠れた。



PCとインターネットがあれば、時間と

場所を問わずに仕事ができる

筆者はこの期間中、国際ジャーナルに提出する論文を執筆し、東京、ワシントン、スウェーデンにメールで連絡を取っていた。そしてやがては中国語で発信されるこの原稿も書いていた。

古民家をリノベーションした宿泊施設であっても、インターネット環境が整備されていれば、テレワークで滞りなく仕事が行えることが証明された。しかも美しい景観を堪能し、適度な運動をして、執筆を行うという絶妙な生活バランスによって、生産性は非常に高かったように思う。

市民とライター達の交流から生まれる創発に期待

そして筆者も1月26日に開催された交流パーティーに参加した。今回公募によりこの時期に参集したのは、ライター、漫画家、イラストレーター、筆者の4名だった。NPOのメンバーと市民も加わって、それぞれの関わっている仕事の内容を紹介し、それに賭ける思い、尾道の感想なども共有した。そして回を重ねるうちに、このイベントの参加者からなんらかの創発が生まれ、本などの形として残せれば、という意見も出た。

実は筆者の会社がある東京都大田区山王周辺は、1920年代から1980年代に多くの文士（作家など文筆業に携わる人々）や芸術家が暮らし、「馬込文士村」と呼ばれた地域である。文士には尾崎士郎、宇野千代、川端康成、三島由紀夫などがおり、日本画家の小林古徑、川端龍子、版画家の川瀬巴水なども居住していた。また、1920年から1936年までは松竹蒲田撮影所もあり、映画製作のスタジオとして活用されていた。抱えている地域資源は、尾道と類似している。みはらし亭で開催された「ライターズ イン レジデンス」は、文化資源を活かす他地域のヒントにもなり、今後の広域連携にも大いに期待が持てる。



それぞれの仕事内容を紹介し合う



NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトのメンバー



交流会で活発な意見交換が行われた

参考資料：

みはらし亭 <http://miharashi.onomichisaisei.com/>

尾道市ホームページ <https://www.city.onomichi.hiroshima.jp>

NPO 法人尾道空き家再生プロジェクト <http://www.onomichisaisei.com/index.php>

馬込文士村 <https://www.magome-bunshimura.jp/>

総務省「平成 25 年住宅・土地統計調査 調査の結果」

<https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2013/tyousake.html>

野村総研 レポート「2030 年の住宅市場 ～人手不足の深刻化により、飛躍的な生産性向上が求められる建設現場～」

<https://www.nri.com/jp/knowledge/report/lst/2018/cc/mediaforum/forum266>

(2019 年 1 月 26 日確認。)

文・照片 奥山 睦
编辑修改 JST 客观日本编辑部